

# 日本NGOから初派遣

ロシア・チェチェン共和国で、日本の非政府組織（NGO）による初の難民医療が始まった。昨年末のロシア軍進攻以来、約四十万人の難民が生まれ、依然としてロシア軍とドゥダエフ大統領派勢力が戦火を交えている厳しい環境の中で、日本人女性スタッフ一人と二人のネパール人医師が走り回っている。（文と写真 モリタワル川明生）



## チェチェン 3人の医療隊

### 難民の村へ「選んだ道だから」

この三人は、調整員としてスカヤ村での診療だった。「糖尿病の薬をなすしてしる大阪府出の赤阪陽子さま（左）、カトマンズ中央病院の内科医ムリリ・ウバドリイさん（中）、耳鼻科医ヤキア・パンダリさん（右）。

四月、アジア医師連絡協議会（AMDA）本部・岡山市を中核とする日本緊急救援NGOグループ（七団体）から派遣された。AMDAは昨ハリシ地震でもいさぐち援助に乗り出した組織だ。

最初の活動は、首都グロズヌイの北四十キロのレニン



●巡回診療で難民を診るパドレイア医師と赤阪陽子さん、チェチェン・レニンスカヤ村で難民三千人が集まったイングリシ園境近くのセルノボツナ村では、わき出る温泉が飲み水だった

保健機関、国連児童基金との協力によるはしかやジフテリアの予防接種も要請されている。

チェチェンの医療水準は本来高いが、医薬品の不足がひどい。NGOとしては「国境なき医師団（本部）（仏）と「世界の医師団」（同）、「メルリ」（安

三人は本部をチェチェン北西部のスナーメンスコエ村に置いて、担当地域はロシア軍の勢力下にあつて比較的的安全だが、衛星電話、ファクスなどの通信設備はない。医薬品は北オセチア共和国の首都ウラジカフカスまで買い出しに行かねばならない。



チェチェン難民は、移民局への登録だけでインテリシ十六万人、ダゲスタン二十二人、北オセチア二十二人、周辺共和国に広がっている。チェチェン国内では五万人といわれるが、難民救援の活動は一筋縄ではない。

例えば三人が医療の一部を分担するよう要請されている首都の難民居住施設。自家発電、給水、給食設備が整った千人の収容能力があるが、入居者は三割に満たない。「ここに入ると、支給されていく補償金ももらえない」といったデマが飛んでいる（現地の職員）からだ。

旧ユーゴスラビアの場合、援助開始から三年たち、衣食住の配給ルートが一応確立されているが、チェチェンには移民局からの援助物資の受け入れ団体もない。「思ったより患者が多く、二人の医師はてんでこ舞いでいる。経済の悪化で病院の医師は年間給料をもらっていないし、医薬品も不足している。歯ブラシ、衛生用品、トイレレットペーパーなども配りたい」と赤阪さんには書かれている。